

ID	受理日	番号	報告者名	一般名	生物由来成分名	原材料名	原産国	含有区分	文献	症例	適正 使用 指 標	感染症(PT)	出典	概要
												チクングニヤウイルス感染	Eurosurveillance 2007; 12(9): E070906.1	チクングニヤ熱は2005年以来、大規模な流行がインド洋諸島とインドから報告されているが、これまでヨーロッパ地域内での蚊による感染伝播は発生していなかった。2007年8月にイタリア・ロマーニャ州ラヴェンナ県衛生当局は異常に多数の発熱患者発生を察知し、臨床・疫学調査を行った。血清学的検査およびPCR法でチクングニヤ熱と確定された。更にトスジシマカからもPCR法によりチクングニヤウイルスが確認された。2007年9月4日までに合計197名の患者が報告されている。
												鳥インフルエンザ	Transfusion 2007; 47: 452-459	血漿製剤の製造中に通常使われるウイルス不活性化処理、即ち、ヒトアルブミンの低温殺菌、静注用免疫グロブリン(IVIG)のSD処理、第VIII因子インヒビターバイパス複合物製剤の蒸気加熱、及びVIGの低pHインキュベーションが、H5N1インフルエンザウイルスの不活性化に有効かを再集合体を使って調べた。その結果、H5N1インフルエンザウイルスは、エンペローブウイルスと同様の挙動を示し、これらのウイルスの不活性化処理によって効果的に不活化化された。
												ウイルス感染	J Clin Microbiol 2007; 45: 3008-3014	ヨーロッパでの出血熱は主にPuumalaウイルス (PUUV) またはDobravaウイルス感染による。ドイツ南西部Lower Bavariaでハンタウイルス感染患者31名について、酵素免疫測定法、免疫蛍光法、免疫プロット法による診断を行った。標準的検査による抗体のPUUV特異的タイピングができない症例が2、3あった。3名の患者の急性期血清から得たPUUV RNAをRT-PCR を用いて増幅したところ、同地域で捕獲したハタネズミ から得たウイルス配列と非常に近縁であることが明らかとなった。
												ウイルス性脳炎	Neurology 2007; 69: 156-165	同種造血幹細胞移植 (HSCT) 後に急性大脳辺縁系脳炎を発症した患者9名の臨床、EEG、MRI、ならびに臨床検査特性を調べた。患者は、順行性健忘、不適切な抗利尿ホルモン分泌症候群、軽度CSF多球症、一時的なEEG異常を特徴とした。MRIでは、T2、FLAIR、DWI画像にて、鉤、扁桃体、内側嗅頭、海馬領域内に高信号域を認めた。PCRを用いた初回髄液穿刺CSFの検査では9名中6名がHHV8陽性であり、同脳炎はHHV8と関連がある可能性が示唆された。